

学習進路通信

2023 年度 第 2 号

6 月14 日発行

文責／学習進路部



2023 年度入試結果 特集号

前号では本校卒業生の進路状況の概要をお伝えしました。本号では 2023 年度入試の全国概況と本校の入試結果について、学習進路部で行った分析結果をお伝えします。

卒業生の入試結果情報については以下の補助資料もご参照ください。

【補助資料】

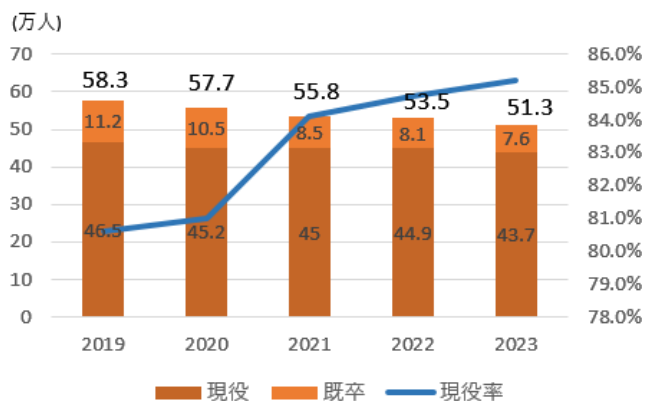
- ① [2022 年度卒生 入試結果総覧](#)
- ② [2022 年度卒生 志望系統別進学データ](#)
- ③ [2022 年度卒生 総合・推薦型選抜入試結果](#)

①は本校の現役生・既卒生が受験したすべての大学について、学部別・選抜方式別の入試結果を一覧にしたものです。②は志望系統別の進学データを系統別・出願数順にまとめたものです。本校生が出願している大学を志望系統別に見ることができます。③は本校生の学校推薦型選抜、総合型選抜の結果をまとめたものです。

1. 入試結果の全国概況

■受験人口の減少・現役率増加が続く

2023 年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」と表記）の志願者数は 512,581 人で、前年比 96.6%でした。少子化等に伴い減少が続く一方で、現役生の割合は増加が続いており、今回の共通テストの現役生率は過去最高で 85%を超えました。（図 1）



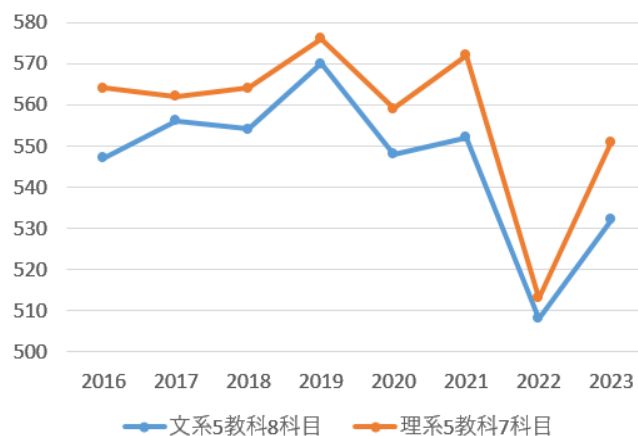
【図 1】 大学入学共通テスト志願者数・現役率推移

※大学入試センター確定値より作成

■共通テスト平均点は前年から上昇

理科で得点調整を実施

共通テストの文系 5 教科 8 科目の平均点は、900 点満点中 532 点（得点率 59.1%）、理系 5 教科 7 科目の平均点は 900 点満点中 551 点（得点率 61.2%）でした。（図 2）



【図 2】 共通テスト平均点推移(900 点満点)

※駿台ベネッセ「データネット」予想平均点より作成

数学ⅠA・ⅡBは前年度の反動で大幅に上昇し、理科では生物と物理の平均点に20点以上の差が生じたため、生物に最大12点、化学に最大7点を加点する得点調整が行われました。

得点調整は2021年度にも公民と理科で行われており、共通テスト実施3年にして早くも2回目の実施となりました。

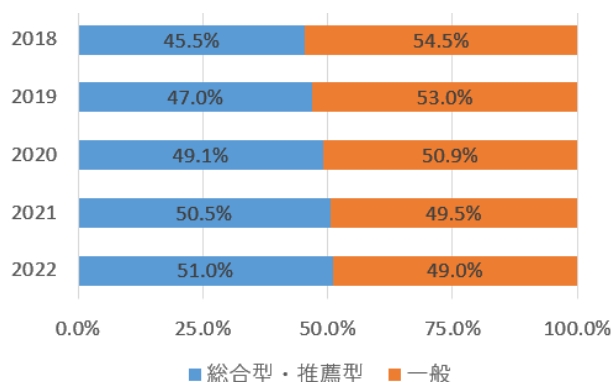
■共通テスト利用大学は過去最多に

受験者が減少する一方で、共通テストを利用した入試を行う大学等は増加を続けています。2023年度入試で共通テストを利用した大学・専門職大学・短期大学の総数は過去最多の870校でした。

首都圏の私立大学では、一部の入試科目について、大学独自試験を作成せず共通テストで代替する大学や、共通テストのスコアのみで合格を判別する選抜方式を拡大する大学が増えています。そのため本校では私大専願者も含めてほとんどの生徒が共通テストに出願しています。

■全国では総合型・推薦型選抜利用は増加傾向 首都圏の大規模校は一般選抜が主流

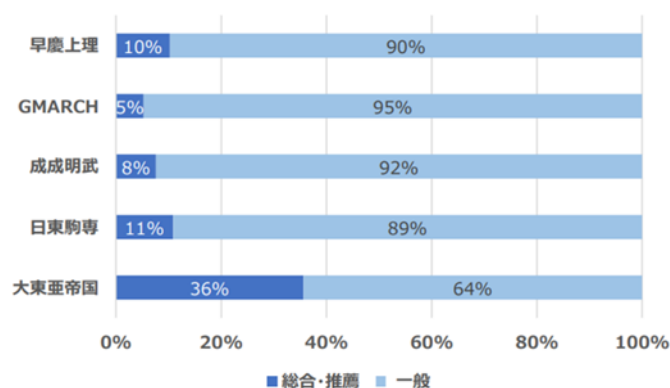
全国では総合型選抜・学校推薦型選抜による入学者の割合は増加傾向が続いており、2021年度入試以降、一般選抜入学者を上回る状況が続いています。(図3)



【図3】選抜方式別入学者割合

※文部科学省資料より作成

その一方で、本校生で志望する人の多い早慶上理やGMARCHと呼ばれる大学グループにおいては、指定校推薦や内部進学を除く募集枠の9割以上が一般選抜によるもので、一般の高校生から公募している総合・推薦型選抜の枠は1割にも満たない状況です。(図4)



【図4】指定校推薦・内部進学を除く募集枠の割合

※ベネッセ資料より引用

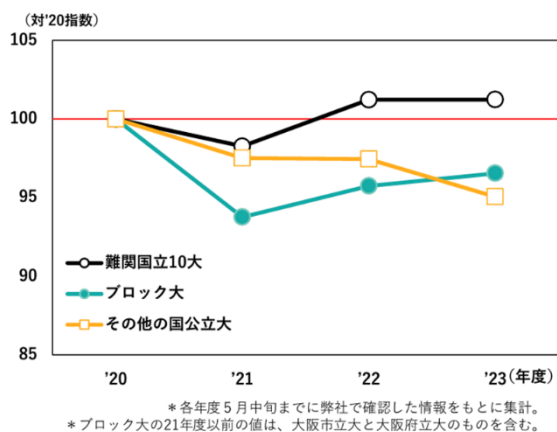
さらに、これらの大学の一般選抜では入学辞退者を見越して募集定員の3倍～4倍程度の合格者を出すため、合格者ベースで見ると指定校推薦や内部進学以外での合格者の実に95%以上が一般選抜での合格となっています。本校からこれらの大学を目指す生徒にとっては、以前として一般選抜での合格を目指すのが主流であるといえます。

■国公立大の志願者は小幅な減少に留まる

難関大が志望者集める一方で地方は緩和傾向

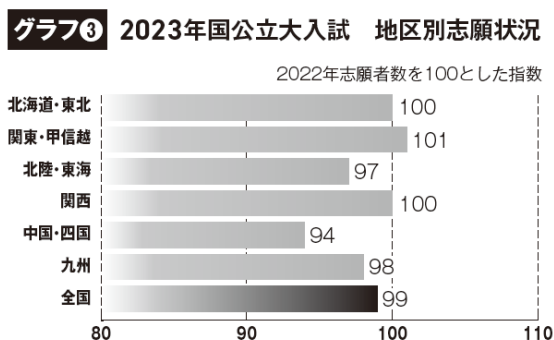
国公立大の一般選抜志願者数は423,131人で、前年比98.7%でした。受験人口や共通テスト志願者の減少に比べると小幅な減少に留まりました。

全体では志願者が減少している国公立大ですが、大学別で見ると難関10大学（東大、京大、北海道大、東北大、名古屋大、大阪大、九州大、東京工業大、一橋大、神戸大）についてはコロナ禍前の2020年度を上回る志願者を集めており、それに続くブロック大（筑波大・千葉大・横浜国立大・金沢大・広島大など）も直近3年間で志願者が増えています。(図5)



【図5】国公立大 大学群別の志願者数の変化
※ベネッセ資料より引用

地域別では地方大学の志願者が減少傾向にある一方で、関東・甲信越地方の国公立大学の志願者は増加傾向にあります。(図6)



【図6】国公立大 地区別志望状況
※旺文社パスナビより引用

リクルート総研の試算によれば、少子化により2023年度の全国の18歳人口は2020年度比で12%減少するといわれています。その一方で首都圏の埼玉・千葉・神奈川での減少幅は10%未満、東京ではむしろ0.6%の増加が予想されています。

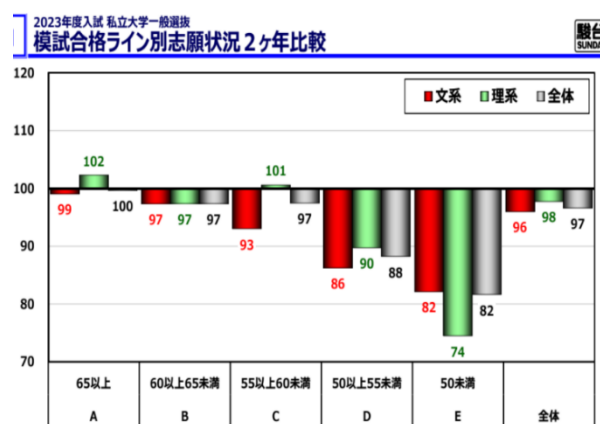
今後、首都圏や大都市圏の国公立大学に比べて、地方国公立大学の入試の競争緩和が一層進むと予想されます。

系統別では、人文科学・外国語・国際系統での減少、経済経営学・医学・歯学での増加が目立ちます。全体的には、昨年度に続き「文低理高」の傾向が見られます。

■私立大の志願者は減少傾向 難関大は人気

私立大の一般選抜志願者は約311.9万人(駿台による推定値)で、前年比96.6%と推定されています。系統別では、国公立大と同様に文低理高の傾向が続いています。

国公立大と同様に全体での志願者は減少していますが、合格難易度が高い大学では横ばいや増加している大学もあり、依然として根強い人気が続いています。一方で、合格ライン偏差値が50未満の大学では前年比8割前後と大きな減少が見られます。



【図7】合格ライン別志願状況2ヶ年比較

※駿台資料より引用。第3回駿台ベネッセ共通テスト模試B判定ラインにより分類。

英語外部試験利用者は、年々増加の一途を辿っています。図8の東洋大のデータを見ると、5~6年前と比べて利用者が急増していることが分かります。ここ数年間で、受験生の間に英語外部試験の有用性・重要性が浸透し、ハイスコア取得者も増加傾向が見られます。



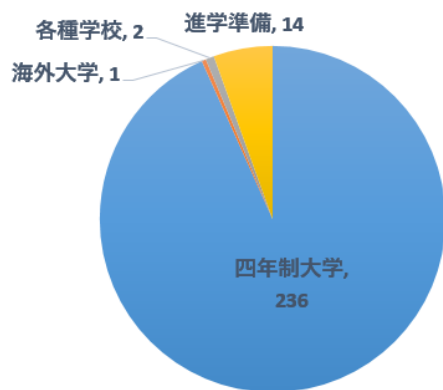
【図8】東洋大(一般)英語外部試験利用人数推移

※代々木ゼミナール資料より引用

2. 卒業生入試結果の全体概況

※入試結果詳細については、冒頭にある「補助資料」をご覧ください

■9 割を超える卒業生が国内の四年制大学に進学 米国名門校への進学も

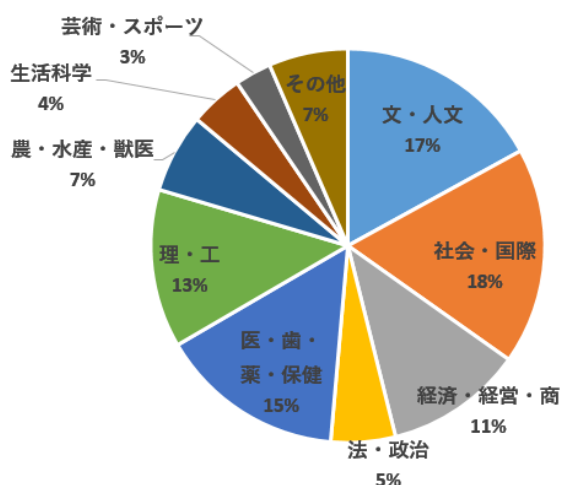


【図 9】2022 年度卒業生 進学先内訳

図 9 は 2022 年度卒業生の進学先内訳です。進学準備の生徒は、1 名が海外大学、その他が国内大学への進学を目指しているため、99%が国内の四年制大学を選択していたことになります。

海外大学に進学する 1 名は、ノーベル賞受賞者を多数輩出している米国の名門校コロンビア大学への進学が決定しています。

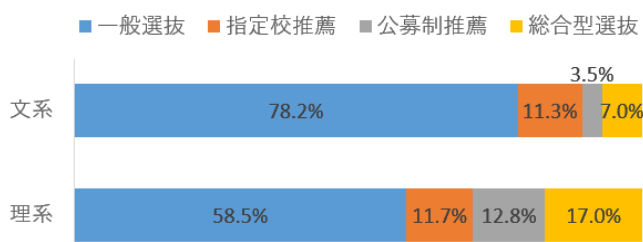
■85 大学 164 学科、都心から地方まで 多種多様な進学先



【図 10】2022 年度卒業生 系統別進学先

四年制大学の進学先は 85 大学 164 学科にも及び、北は東京農業大（北海道オホーツクキャンパス）、南は立命館アジア太平洋大（大分県）と全国各地の多種多様な大学・学科に進学しています。

■文系の約 8 割、理系の約 6 割が一般選抜で進学



【図 11】2022 年度卒業生 選抜方式別進学者割合

図 11 は文系・理系それぞれの選抜方式別の進学者割合です。全体の 7 割が一般選抜で進学しています。

理系の推薦型選抜・総合型選抜の割合が比較的高いのは、研究したい内容とのマッチングを重視する傾向や、医療系学部など学力に加えて人物面も重視する学部・学科で推薦型選抜・総合型選抜の募集枠を比較的大きく設けている大学があることなどが要因として挙げられます。

一方で、文系は早慶上智・GMARCH などの大規模校を志望する生徒が多いため、一般選抜の割合が比較的多くなっています。

3. 卒業生の入試結果(国公立大)

■東京大学や難関国立大を含め 15 名が合格 うち 12 名が進学

現役生はのべ 41 名が国公立大学を受験、うち 15 名が合格し、12 名が進学しました。合格校は以下の通りです。

- ・東京大（文科一類）
- ・東京外国語大（国際日本）
- ・東京学芸大（教育）
- ・東京海洋大（海洋工・海洋生命科学・海洋資源環境）

- ・電気通信大（情報理工）
- ・横浜国立大（理工）
- ・筑波大（人間）
- ・神戸大（海洋政策科学）
- ・群馬大（理工）
- ・室蘭工業大（理工）
- ・九州工業大（工）
- ・東京都立大（法）
- ・横浜国立大（国際商）

また、この他に防衛省が設置している防衛医科大学校（医）に1名が合格しています。

■過去4年間で最多の国公立大進学者数 理系生徒は地方国立大への進学も

【表1】過去4カ年 国公立大学進学者数

※（ ）内は既卒生。文系は赤、理系は青の網掛け

	2020	2021	2022	2023
室蘭工業				1
岩手	1			
筑波				1
茨城		1		
埼玉	1			
埼玉県立	1			
千葉	1			
お茶の水女子			1	
電気通信				1
東京				1
東京医科歯科		1	1	
東京外国語		1		1
東京海洋			1	3(1)
東京学芸			2	1
東京工業		(1)		
東京農工			1	(1)
一橋		(1)		
横浜国立				1
横浜国立				1
金沢	1			
石川県立				(1)
九州工業				1
長崎			(1)	
鹿児島		2		
琉球		1		
合計	5	6(2)	6(1)	12(3)

表1は、本校における過去4カ年の国公立大進学者数です。2023年度は直近4年間はもちろん、過去10年間で最も多い進学者数となりました。

本校の卒業生には、首都圏の難関国立大への進学者がいる一方で、北海道から沖縄まで全国各地の大学に進学している先輩がいます。岩手大と金沢大は理工学部、茨城大と琉球大は農学部、長崎大は環境科学部、鹿児島大は水産学部、石川県立大は生物資源科学部にそれぞれ在学しています。

地方国公立大にはその大学だからこそ学べる研究環境がある場合が少なくありません。大学院進学やその後の研究生生活を視野に入れて進学先として選択する生徒が増えています。

4. 本校生の入試結果（私立大）

■文系は MARCH・早稲田・女子大、 理系は理工・農・医療系大の出願が目立つ

【表2】文系卒業生 主な出願校

※出願数には不受験も含む

	大学	出願	合格	進学
1	立教	202	44	11
2	法政	177	38	6
3	早稲田	153	10	6
4	明治	150	33	14
5	明治学院	98	43	7
6	昭和女子	93	38	7
7	東洋	92	46	9
8	青山学院	85	19	4
9	中央	77	12	5
10	専修	73	25	3
11	成城	73	28	4
12	日本	66	19	2
13	日本女子	62	17	5
14	共立女子	52	28	3
15	学習院	45	13	3
16	上智	41	13	1
17	東京女子	40	23	4
18	跡見学園女子	38	24	2
19	駒澤	36	10	1
20	國學院	33	14	5

表 2 は、文系卒業生の出願数上位 20 校です。MARCH の出願が多数を占め、続いて早稲田や女子大の出願が目立ちます。

【表 3】理系卒業生 主な出願校

※出願数には不受験も含む

	大学	出願	合格	進学
1	法政	75	17	2
2	東京農業	40	14	5
3	東京工科	40	22	2
4	芝浦工業	39	12	2
5	日本	38	17	1
6	東京理科	36	13	7
7	順天堂	32	12	6
8	東京都市	32	11	1
9	帝京	31	12	5
10	明治	31	8	1

表 3 は、理系卒業生の出願数上位 10 校です。文系で総合大学や女子大の出願が目立つのとは対照的に、理工系・農業系・医療系など理系分野に特化した大学の出願が目立ちます。理系は系統によって出願校が異なるため、冒頭で示した補助資料②もあわせてご参照ください。

■医学部医学科には推薦・一般で 4 名進学

医学部医学科には 4 名が進学し、近年で最も多い進学者数になりました。このうち 1 名は、優秀な成績と明確な志望理由を活かして公募制推薦で合格しました。他 3 名は、着実に学力を高め続け一般選抜で合格しました。この 3 名が高 3 時の 10 月に受けた第 3 回全統記述模試では、3 名とも 60 を超える偏差値でした。

また、既卒生では 2 名が医学部医学科に進学し、中には卒業後 3 年間も受験勉強を続け合格を果たせた既卒生もいました。

■模試成績と合否の関係

表 4 は、一般選抜を受験した生徒の模試成績（河合塾模試偏差値）と合否の関係を表したものです。表の見方は、縦項目が「受験した大学のボーダー偏差値－受験した生徒の模試偏差値」、横項目

がそれぞれの合格者・不合格者・進学者・合格率を示しています。例えば受験校のボーダー偏差値が自分の模試偏差値よりも「+5.0～7.4 高かった場合は、合格率が 19%だったということになります。

この表を見ると、一般選抜においては、受験した大学のボーダー偏差値と受験した生徒の模試偏差値の差が、合格率と一定の相関関係にあることが分かります。

自分の模試成績よりもボーダー偏差値の高い大学に合格しているケースももちろんありますが、模試成績とボーダー偏差値の差が大きくなればなるほど合格率は下がることもまた事実です。

自分の模試成績よりもボーダー偏差値が 5 ポイント以上高い大学に合格している割合は 20%にも満たないという状況です。この状況をふまえるとまずは模試成績の元となる学力を上げていくことが志望校への合格の確率を上げることに繋がるといえるでしょう。

【表 4】一般選抜における模試偏差値と合否の関係

	合格	不合格	進学	合格率	
+15.0以上	1	126	0	1%	28%が 目標校に 進学
+12.5以上	7	76	2	8%	
+10.0以上	13	111	8	10%	
+7.5以上	28	133	12	17%	
+5.0以上	40	173	18	19%	67%が 相応校に 進学
+2.5以上	87	152	23	36%	
+0.0以上	105	192	31	35%	
-2.5以内	89	68	15	57%	
-5.0以内	113	25	28	82%	5%が 安全校に 進学
-7.5以内	62	12	4	84%	
-10.0以内	54	1	2	98%	
-12.5以内	13	3	0	81%	
-15.0以内	13	1	1	93%	
-15.0より下	4	0	0	100%	

※2022年度第3回全統記述模試受験者の合否結果

その一方で、同じ表の進学者数を見ると、30%近い生徒が自分の模試成績よりもボーダー偏差値が 5 ポイント以上高い大学に進学していることが分かります。これは、志望校選びにおいて、担任の先生等との面談を通して本人の志望と学力特性を踏まえて、目標校・相応校・安全校を組み

合わせて、より志望の高い大学に合格できるように併願作戦を立てた結果であると考えられます

最終的には、一般選抜で受験した生徒の 95%が目標校・相応校に進学しています。

安全校に進学したケースでも、たとえば第一志望の東京大に進学した生徒もここに含まれていることからわかるように、あくまで本人の模試成績と大学のボーダー偏差値の差の関係で安全校になっているだけで入試結果としては満足のいく結果であったケースが多いです。

こうした結果を見ると、2023 年度入試では多くの生徒が満足のいく進学先に進学できたといえるのではないかと考えられます。

■難関私大合格者の全統模試偏差値

GMARCH は 60 前後、早慶上は 70 前後

表 5 は、主な難関私大合格者が高 3 時 10 月に受けた第 3 回全統記述模試の偏差値についての表です。平均偏差値は、GMARCH や東京理科大は概ね 60 前後、早慶上智は概ね 70 前後でした。昨年度と比較すると、MARCH はやや下がり、早慶上智はやや上がっています。偏差値帯にはばらつきがありますが、GMARCH の合格を目指すのであれば概ね 60 以上、早慶上智の合格を目指すのであれば少なくとも 65 以上、できれば 70 以上に到達することが目安になると言えます。

【表 5】主な難関私大合格者の偏差値

※2022 年度第 3 回全統記述模試の偏差値

	合格者平均偏差値	合格者偏差値帯
慶應義塾	72.9	64.2～77.2
早稲田	68.2	55.2～77.2
上智	68.0	57.5～77.2
明治	61.4	48.0～70.7
立教	61.2	51.2～77.2
学習院	59.2	54.7～63.4
東京理科	58.8	47.9～62.0
青山学院	58.2	50.6～64.3
中央	57.1	48.6～63.5
法政	56.5	40.8～68.4

5. 本校生の入試結果（総合・推薦型選抜）

※結果詳細については、冒頭に示した「補助資料③」をご覧ください

■指定校推薦で 27 名 公募制推薦で 17 名が進学

学校推薦型選抜（指定校制）には 28 名が受験、27 名が合格・進学しました。

公募制推薦にはのべ 35 名が受験、18 名が合格、17 名が進学しました。筑波大・東京外国語大・電気通信大といった首都圏の国公立大、帝京大医学部、慶應義塾大・上智大といった難関私立大にも合格者が出ました。

■総合型選抜では 26 名が進学 大学とのマッチングが合格に繋がる

総合型選抜では、のべ 95 名が受験、39 名が合格、26 名が進学しました。

近年、総合型選抜の受験者は増加傾向にあり、人気の大学や志望系統では一般選抜を超える高倍率になっているケースも珍しくありません。その中で、募集枠の少ない難関大に合格した生徒は英検 1 級など、客観的に示せる自分の「強み」をアピールできたことが合格に結びついたと考えられます。

総合型選抜で大学が重視するのは大学が求める学生像と受験生のマッチングです。栄美通信による調査結果によれば、総合型選抜の面接で聞かれることが多い上位 3 項目は、「志望動機」・「志望学部や学科の理解と学習意欲」「入学後の抱負や計画」とされています。志望する大学や研究の特徴、求める学生像を理解した上で、自分の志望との結びつきや入学後の学習計画や進路設計を具体的に示すことで、自分が大学の求める学生像にマッチすることをいかに示せるかが重要です。

■「一定の学力」を前提とした上で「学力以外」も見る入試

総合・推薦型選抜については「学力以外の力」を見る入試、というイメージを持っている生徒が

多くいますが、この点については注意が必要です。表6は、学校推薦型（公募制）選抜および総合型選抜受験者を受験した生徒の模試成績（河合塾模試偏差値）と合否の関係を表したものです。

この表を見ると、受験した大学のボーダー偏差値以下では、一般選抜と同様に、模試成績と合格率が比例していることが分かります。つまり、総合・推薦型選抜においても「一定の学力」があることが求められていることが分かります。

一方で受験した大学のボーダー偏差値を超えた部分を見ると、模試成績と合格率との相関性が低くなります。このことは「一定の学力がある」生徒の中では、「学力以外の部分」が合否に関わっていることを示しています。

つまり、総合・推薦型選抜は「一定の学力」がある生徒の中で「学力以外の部分」も見入試であると理解した方がより現状に合っているといえます。

【表6】推薦型（公募制）・総合型選抜受験者の模試偏差値と合否の関係

	合格	不合格	進学	合格率
15以上	3	10	1	23%
10以上	4	11	4	27%
5以上	12	20	10	38%
0以上	19	14	18	58%
－5以内	24	6	19	80%
－10以内	12	2	10	86%
－15以内	4	1	3	80%

※2022年度第2回全統記述模試受験者の合否結果

総合・推薦型選抜での進学を考えている生徒は、まずは「学力以外の部分」で自分の「強み」を作ると同時に、「一定の学力」を身に着けるための努力も怠らないことが合格への近道です。

[2022年度指定校一覧](#)（※2022年度第4号の再掲）

おわりに

ここまで、全国的な入試概況および本校卒業生の入試結果分析をお伝えいたしました。現在の入試動向についてはインターネット等でも様々な情報が流れていますが、本記事が大学入試の現

状を把握する一助となれば幸いです。

最後に卒業生アンケートから在校生へのメッセージを抜粋したものを載せましたので、ぜひご参照下さい。生徒にとって最終的な進学先は1つですが、そこに至るまでに数えきれない努力の積み重ねがあります。皆さんの「志」の実現に向けて、それぞれの学年で今できる最善の努力を積み重ねていきましょう。

卒業生アンケートより 「在校生へ一言メッセージをお願いします」

♥最後まで妥協しないで必死に取り組めば必ず道は開ける！ ♥高校3年生の1年間だけ頑張って合格できるというほど受験は甘くありません。中学高校の積み重ねがとても大事だと思います ♥今苦労しておくで後で格段に楽になります ♥現状をちゃんと受け止め着実に勉強を進めること ♥基礎をきちんと固めることが1番の受験の近道 ♥英検は本当に大事 ♥自分が進みたい道を信じて最後まで駆け抜けてください ♥受験は想像以上に激しい戦いで、ネットを信じて油断するとすぐに落ちます。驕らず諦めずに勉強を継続することが合格への一番の近道です ♥早く始めてどれだけ長く走り続けられるかが勝負だと思います。焦らず着実に頑張ってください ♥定期テストきちんとやれば受験に必要な基礎は身につく ♥勉強の辛さよりもその後に得られる自信や希望はとても大きいです。日々の勉強を怠らない！ ♥辛い時は抱え込まずに誰かに話を聞いてもらったりすることも大事 ♥将来やりたいことが決まってくなくて勉強に身が入らない人も少なからずいると思いますが毎日何かの科目に触れておくことでそれが将来の合格につながると思う ♥心身ともに辛い大学受験だけれど合格の2文字は本当に嬉しくてたまらないです ♥やりたいことをその時のもので良いので明確化するべき。積極的に興味が湧くことについて知見を深めれば、夢を叶えられる大学選びにつながるはず ♥やらなかったことに後悔はあるかもしれませんが、やってきたことに後悔はありません ♥大学受験は“結果”だけではなくて、その“過程”で何を学んだかが自分の成長になります。自分が受験終わった後に1歩でも成長したと言えるよう、楽しく頑張ってください